

棕の道草 第26号 「つとめて」

ばんだ

冬深しつとめてといふ言の葉に

石田郷子

初めての古文の授業は高二の四月だった。「枕草子」第一段。「春はあけぼの。やうやう白くなりゆく、やまぎは…」先生は三十代終わりくらいの男性、中背、小太り。生徒からは代々「ポテ」と呼ばれていた。

さてその最初の授業である。軽い自己紹介が終わると、席順に答えさせられた。「春はあけぼの」を現代語訳してみよ。「春は夜明けだ」と最初の生徒が答える。だめ。次の生徒もその次も多少のバリエーションを試みるが、よしとは言われない。十人ほどがだめをもらってから、「春＝夜明け」かと問われた。「私は高校生」なら「私＝高校生」だが、春と夜明けはイコールか？と。結局「はるはあけぼの」の七文字で50分の授業は終わった。衝撃だった。もちろん「あけぼの」の後に「をかし」が省略されていることを頭に叩き込まれて。

それは古文を古い日本語としか思っていない生徒たちに、言ってみれば別世界の扉を開いてみせたのかもしれない。まんまと開けてしまった私は目から特大の鱗を落とした。

そしてこの世界を知るにはツールが必須であることも追々理解する。文法だ。こんな先生だったから、ついていくには真面目に努力するしかなかった。

次の授業からは多分カリキュラム通りに進んだと思う。そして、私には次なる出会いがあったのだ。枕草紙の夏、秋が終わり、「冬はつとめて」。

「つとめて」。それまで知っていた「つとめて」とは全く違う意味を持っていた。早朝のことと知ったとき、何とも言い表せない、静かで豊かな海にいるような感覚になった。古語のたたずまいとでもいうのだろうか。美しく穏やかで、心の深いところにすうっと収まる。たったひとつの単語だったけれど、古語の言葉の魅力に圧倒された思いだった。

またひとつ努力をしなければならないことが増えたが、文法とは違い、知らなかった言葉を覚えることはコレクションに少し似ていて、語彙が増えていくことはとても楽しかった。

私なりの努力をした二年間だったが、大学では文学を専攻することはなく、当然古文ともすっかり遠ざかっていた。が、五十歳を越えてから何故か俳句を始めることになったとき、ハードルをあまり感じることはなく伝統俳句を選んだのは、高校時代の古文の文法を少しは覚えていたからだろう。さすがに文法は当時の半分も思い出せないが、ふと浮かんでくる言葉はそのときに貯めたものがひょっこり現れてくれるのだろうと思う。

そして掲句である。郷子先生のこのお句を棕誌で拝読したとき、「つとめて」を始めて知ったときのことを鮮明に思い出すとともに、同じような豊かな感覚に包まれた。何よりうれしかったのは「つとめてといふ言の葉に」の措辞だ。「つとめて」の持つ清々しさと透明感と静寂。冬が進んでいく季感をその「言葉」から感じられたという。深く共感した。

私の言葉好きは今も変わらず、うまく掴まえた言葉は句にしたいと思う。言葉先行型なのだ。そしてこの作句法の勝率は大変低い。もう十年以上俳句をしているのだから思い切れば良いと思うのだが、これがなかなか…。